様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８５２９

研究課題名（和文）自文化の民族誌への挑戦：生まれ育った横須賀から日本文化・社会を再考する

研究課題名（英文）Challenge to Ethnography of My Culture: A Perspective on Post-War Japan from Yokosuka under American Shadow

研究代表者
清水　展（SHIMIZU, Hiromu）

関西大学・政策創造学部・特別任用教授

研究者番号：７０１２６０８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　「自文化の民族誌」のパイオニアである中根千枝・東大名誉教授（『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』1967）を取りあげ英語と日本語で論文を作成した。英語版"The Life and Works of Prof. Chie NAKANE"は文化人類学会の英文学会誌に投稿し現在査読中である。日本語版「中根千枝：遠くから眺め、近寄って凝視し、比較して考える」は清水展・飯嶋秀治（編）『自前の思想：時代と社会に応答するフィールドワーク』（京都大学学術出版会 2020）に収録予定である。
　戦後横須賀の社会誌を単著として執筆するために必要な資料と情報の収集をほぼ完了し執筆に取り掛かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』は、半世紀にわたってコンスタントに売上を伸ばし続け、現在までに117万部に達する。同書はコンパクトで読みやすく、論述と分析は明快であり、日本人の自画像・自己意識の形成に大きな影響を与えた。
　しかし同氏に関する研究は皆無である。拙稿は、数回にわたるインタビューや文献資料、直接に指導を受けた学生としての私自身の経験や記憶から、中根氏のオリジナルな発想と分析が可能になる同氏の知的形成の過程と背景を考察した。また同書が学術界のみならず、官僚、ビジネスマン、市民らに広く受け入れられ影響を及ぼした理由を明らかにした点に学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　I wrote two articles on Prof. Chie NAKANE, a leading social anthropologist and famous for her popular book on Japanese society. One in English and the other in Japanese. The English one was submitted to Japanese Review of Cultural Anthropology and is now under referee reading. The Japanese one will come out in October in a book published by Kyoto University Press.

研究分野：文化人類学

キーワード：自分＝自文化の民族誌　日本人／社会の自画像　戦後横須賀・横浜　米軍基地の文化的影響

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

文化人類学は異文化理解・他者理解の学であるが、その理解の根本には自文化との比較があるという暗黙の前提は忘れられてきた。本研究では、そのことを強く自覚し、日比両国を比較する観点から、横須賀米軍基地の近くの引揚者寮で生まれ育ち、アメリカへの反発(基地の暴力)とアメリカ大衆文化への心酔に引き裂かれて青春を送った自身の心象風景・精神世界を腑分けし分析する。それを通して、アメリカの影のもとでの自己形成という視点から、日比の政治文化に関する新たな洞察を得ることを試みる。

２．研究の目的

目的は２つある。第１は、文化人類学における比較の方法を自文化へ適応し、自文化の民族誌を作成する。それをとおして、異文化・他者理解を迂回した後に可能となる自文化の民族誌という、文化人類学における新たな分野と方法を開拓する。
第 2 は、申請者が提唱してきた「応答の人類学」という問題意識のもと、アメリカと日本の戦後の特殊な関係を横須賀に焦点を当てて吟味再考し、フィリピンと比較しつつ日本社会・文化論に新たな視点と素描を提示する。

３．研究の方法

関係者への聞き取りと図書館や市役所等での資料閲覧・収集を横須賀と横浜で行うことを研究の柱とする。横須賀は私自身が生まれ育ち 20 歳まで暮らした街であり、子供時代からの友人知人が多く住んでいる。また横浜は小学校から高校まで 12 年間通った学校（関東学院六浦小中高校）があり、同級生らが多くいる。彼ら彼女らとは調査研究への協力依頼をして快諾を得ている。また比較のために沖縄とフィリピンでも資料収集を行う。

４．研究成果

具体的な成果としては、① 清水展 2020「中根千枝：遠くから眺め、近寄って凝視し、比較で考える」清水展・飯嶋秀治（編）『自前の思想』京都大学学術出版会。② 清水展 2020「外部思考＝感覚器官としての異文化・フィールドワーク：ピナトゥボ・アエタの４０年の関わりで目撃した変化と持続、そして私の覚醒」『東洋文化』100 号、ほかがある。

① は、自文化(日本社会)の民族誌の好著である『タテ社会の人間関係:単一社会の理論』(1967)の著者として有名な中根千枝・東大名誉教授を取りあげ、そのオリジナルな分析の由来について、生育歴や研究者としての自己形成の過程に注目して考察した。中根は日本を代表する文化人類学者（女性初の東大教授、学術系として女性初の文化勲章受章者 2001 年）であり、同書は日本人の自画像・自己意識の形成に決定的な影響を与えた。にもかかわらず学術的な中根論は皆無である。本稿は英語版（*Japanese Review of Cultural Anthropology* [日本文化人類学会英文学会誌] に投稿・査読中 ）とともに、日本における文化（社会）人類学のパイオニアとしての中根の全貌を明らかにしようとした企てとして本邦初の取り組みである。氏への数回のインタビューなどによって事実関係の正確さを期してており、中根論の基本文献となるであろう。

② は、横須賀で生まれ育ち身近にある米軍基地への嫌悪と、音楽や映画をとおしたアメリカ大衆文化へのあこがれに引き裂かれながら自己形成した私自身の作り直しのために文化人類学を学び、近代とはもっとも遠い世界で暮らす北ルソン山地の先住民の村でフィールドワークを行った経緯に関する報告と内省的な分析である。
文化人類学の民族誌のほとんどが他者表象の企てであることに対して、E.サイード『オリエンタリズム』(1978)やJ.クリフォード & G.マーカス『文化を書く』(1986)が、その知的営為を裏で支える政治的・知的なヘゲモニー（権力関係）を厳しく批判した。それに対して、文化人類学者の多くは民族誌の書き方を「民主化」する方向へ、すなわち表象する側（西側知識人）と表象される側（非西欧の現地人）との権力関係をより平等で民主的なものとする記述のスタイルを模索する形で対応した。しかし私自身は、問題の所在は記述のスタイルにあるのではなく、調査する者と調査される側との関係のあり方、作り方であると主張してきた。それと並行して、現地に深くコミットする人類学を「応答する人類学」と称し、自らも災害復興支援や住民主導の植林運動の現場に積極的に関わり、NGO ボランティア・ワーカーとして働きつつ同伴レポーターの役割を果たしてきた。
本稿は、他者（フィリピンの先住民）との出会いと交流をとおした私の覚醒と変身、すなわち自己の再構築または「自分化」についての内省的報告と外在的考察である。自己の内面と外世界（コンテクスト）を往復しながら、自身を解剖台の上に載せて分析する手法はきわめてラディカルで画期的な企てであり、文化人類学の新たな転回＝展開への挑戦である。と同時に挑戦的科研

プロジェクトの最終成果として計画している『自文化＝自分化の民族誌：戦後ヨコスカの心象風景』のためのデッサンともなっている。
　現地の喫緊課題に住民とともに取り組み解決への一助となることを目指す「応答する人類学」については、フィールドワークをする文化人類学の一般的で根本的な問題として、SHIMIZU, Hiromu, 2018, “Reflections on the “Anthropology of Response–ability through Engagement: A Long and Winding Road from Fieldwork to Ethnography, Commitment and Further Beyond” *Japanese Review of Cultural Anthropology,* Vol.18., No.1, pp.5-36 で考察している。日本から英語でラディカルな発信をした点で、フィリピンをはじめ英語圏でも注目されている。

　以上の研究成果をふまえて計画している単著『自文化＝自分化の民族誌』を作成するために必要な情報と資料については、横須賀市立図書館や横浜市立図書館、その他の資料館、博物館等で閲覧やコピー取りを済ませている。また横浜・横須賀の戦後社会史における米軍基地の影響ついては、小中高（横浜の関東学院六浦小中高校）の同級生や地元の友人、知人らにインタビューを行っている。草稿の章立てと概要については京都大学学術出版会の鈴木哲也編集長と相談しており、2021 年に同会から出版する予定である。ちなみに鈴木氏ご自身が横浜根岸の米軍基地の近くの高校に通い米軍基地の影の下で自己形成しており、その個人史も興味深く長時間の聞き取りも行っている。
　同書は「ライティング・カルチャー・ショック」を正面から受け止め、欧米とは異なった対応を模索し実践してきた私自身を素材として、人類学のフィールドワークと民族誌への新たな取り組みと展開・深化を目指す点で画期的であると自負している。
　それとともに、20 世紀の初頭から 50 年ほどアメリカの植民地支配を受けたフィリピンと、1945 年の無条件降伏から 1951 年のサンフランシスコ平和条約までアメリカの占領支配を受けた日本が、フィリピンでは英語教育によって、日本では巧妙な検閲によって、親米の心性を養われ飼いならされた過程を明らかにする。そして両国がアメリカ（マッカーサー）を父とする異母キョウダイであるとの視点からの日比の比較考察と、日本の自画像の再検討を構想している。中根による日本人の自画像が主に中国とインドを比較考察の対象としているのに対して、フィリピン・日本・アメリカの三角測量による日本社会理解の企ては斬新で挑戦的である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Hiromu SHIMIZU	４．巻 査読中
２．論文標題 The Life and Works of Prof. Chie NAKANE: A Pioneer of Social Anthropology in Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水展	４．巻 100号
２．論文標題 外部思考＝感覚器官としての異文化・フィールドワーク：ピナトゥボ・アエタの４０年の関わりで目撃した変化と持続、そして私の覚醒	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文化	６．最初と最後の頁 41－76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15083/00079036	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SHIMIZU Hiromu	４．巻 18－1
２．論文標題 Reflection on the “Anthropology of Response-ability through Engagement: A Long and Winding Road from Fieldwork to Ethnography, Commitment and Further Beyond	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	６．最初と最後の頁 33-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14890/jrca.18.1_5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水展	４．巻 1
２．論文標題 フィリピン先住民にみる災害とレジリエンス	５．発行年 2018年
３．雑誌名 奈良由美子・稲村哲也（編）『レジリエンスの諸相』放送大学出版会	６．最初と最後の頁 175-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Hiromu SHIMIZU
2．発表標題 Ethnogenesis of Katutubo (indigenous) Ayta: Engaged Anthropology of 40 Years before and after Mt. Pinatubo Eruption in 1991
3．学会等名 CHAGS XII (The International Conference on Hunting and Gathering Societies,（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hiromu SHIMIZU
2．発表標題 Anthropology of “Response-ability
3．学会等名 PSCJ IV (Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 Hiromu SHIMIZU	4．発行年 2019年
2．出版社 Kyoto University Press	5．総ページ数 469
3．書名 Grassroots Globalization: Reforestation and Cultural Revitalization in the Philippine Cordilleras	

1．著者名 清水展	4．発行年 2019年
2．出版社 九州大学出版会	5．総ページ数 384
3．書名 出来事の民族誌：フィリピン・ネグリート社会の変化と持続	

１．著者名 速水洋子（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 京都大学出版会	５．総ページ数 596
３．書名 東南アジアにおけるケアの潜在力　（清水展、冨田江里子　「草の根国際交流の実践としてのケア」pp. 539-571）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考